

# 第34回 全国読書作文コンクール 優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会



## 令和六年度 第三十四回 全国読書作文コンクール

### 小学生の部・大賞

折った人の思いを伝える



川本 結子 (小六)

わたしは、この夏に広島を訪れました。

もちろん世界で初の戦争の被爆地である

広島には、歴史的な平和シンボルが多く

あることは知っていました。

しかし、今回この「生まれかわるヒロシ

マの折り鶴」という本と出会い、そこで感じた辛い、悲しいといった感

情とはまた違った日本人の魂にある美しくも強い何かを受けとることが

出来ました。

まず、この物語は「原爆の子の像」のモデルとなった禎子さんの被爆

体験、そしてそれを取り巻く周囲の友人のお話ではじまります。

二歳で被爆体験をし、六年生になるまで一日も学校を休んだことがな

いほど健康であったこと。原爆投下から十年という歳月がたったにも関

わらず、迫り来る病から逃れることが出来ない運命にあったわたしと同じ歳の女の子に、胸が押しつぶされそうでした。こんなことがあっていいのかと、戦争を強く憎みました。もっと生きていたかっただろう。もっと友達と家族と楽しい時間を共有したかっただろう。今から、自分が体験するであろう小学校から中学校への進級、そして将来を考えて友人と過ごす学生生活を思い、やりきれなくなりました。

ところが、この本にはまだ続きがあったのです。禎子さんへの思いを忘れないようにとまだ中学生であった友人達が様々な人に掛け合い、慰霊碑を作るように働きかけます。わたしは、大人が子ども達へ戦争の教訓や歴史を伝えるためのシンボルとして建てたものだと思っていたのでこの事実には驚きました。実際の「原爆の子の像」の建立を呼びかけたピラの写真も一字一字大切に読みました。同じ六年生が起こした行動だと思いと、とても誇らしく感じました。

しかし、物語はさらに違った角度から問題提起をします。それは、皆が良かれと思い持参した折り鶴の問題です。平和を願いコツコツと作りだめた折り鶴の処分に広島の方々には頭を悩ませていたのです。ここからが、素晴らしくもたくましい日本の姿でした。焼却をせざるをえないとされた折り鶴を永久保存する方法はないかと考えます。

さらには、「永久保存」から「活用」へと方針を換え、折った人の気持ちを守りながらも日本人の心に根付くもつたない精神であり、今の社会にあったSDGsでもあると思いました。ここまで読み進めると原

爆の被害者である日本人、多くの犠牲者を生んでしまった戦争、その辛く悲しい経験ですら糧とし前向きに進む日本人は、素晴らしくたくましいものでした。わたしが感じたのは、その強い志の中にも、丁寧な鶴を折った人の思いを大切にしている日本人の温かさが印象的でした。この本を読む前と読んだ後では、暗かった心が日本人として誇らしいような勇氣が芽生えてきた気がしました。

対象図書名 生まれかわるヒロシマの折り鶴

### 大賞へ、審査員のひとこと

この作品は、六年生という年齢にしては非常に成熟した表現力を持っており、深いテーマを扱いながらも読者を引き込む力が際立っています。感情の動きを巧みに捉え、心に響くメッセージをシンプルかつ力強く伝えていく点が評価されました。特に、自分の体験を通して普遍的な価値を描き出しているところが素晴らしいです。今後、さらに文章力が発展していくことが期待されます。

### 受賞者のひとこと

私が最初にこのコンクールに応募したのは一年生の時です。本を読むことは好きですが上手く自分の気持ちを表現できません。国語への苦手意識があるのかもしれない。

でも、今回この本と出会い、同年代の子の心の動きや活動、「平和とは」という本当の意味を知り、素直に書きたいと思うことが出来ました。それがまさかこのような素晴らしい賞を頂けるとは思わず驚いています。

まずは、この本と出会わせてくださった関係者の方々、そしていつも国語の添削、御指導頂いている先生方に感謝致します。

そして、継続は力なり。諦めず苦手なことにも挑戦し続けたことは、自分の努力を誇りに思っています。

### 小学生低学年の部・最優秀賞(小一)

ぼくは、ぼくがすき

恒成 春大



もおどろきました。

もうひとつ、いやなことをいわれてもはるとのようにはらへらわらってやりすごすなんてぼくにはありえないとおもいました。

こんなにたくさんおどろくことがあるということは、ぼくのなかみとみんなのなかみはぜんぜんちがうものなんだとわかりました。

のぼるみたいにひとをきずつけていたら、きづかないうちにじぶんのこともきずつけているのです。そのきずはなおりません。

ぼくはおかあさんに「いちどくちにだしたことはとりけせないんだよ」といわれたことがあります。そのいみがすぐにはわかりませんでした。わかったのは、てがみをかいてもじをゴシゴシとけしごむでけしたときです。

それから、あとからやっぱりとりけしたいとおもうようなことばを

いうのはやめました。そのことをのぼるにもおしえてあげたいです。

はるとはじぶんのことをよわむしで、まいちゃんはゆうきとかっこよさでできているっていつていたけれど、まいちゃんだってそんなふうにキラキラしているものをもとからもつていたわけじゃないかもしれないとおもいます。もしかしたらはるとのようによわむしがこころのなかにいたかもしれません。つよくてかっこいいじぶんになりたくて、よわむしをおいでしたのかもしれない。

ぼくってこうだからってあきらめるのではなく、なりたいじぶんになれるようにがんばるっていうこともひとつようなんじゃないかとおもいます。

ぼくは小学一ねん生になって、やきゅうチームにはいりました。まだまだボールキヤッチもバッティングもうまくできないので、じょうたつしたくてれんしゅうをがんばっています。たくさんれんしゅうしても、おなじチームのおにちゃんたちのようにはできなくて、くやしいおもいをしています。それでもあきらめません。あきらめむしはぼくにはいらないからです。

いまのぼくのなかにはいったいなにがいるのか、かんがえてみました。

大きな大きなまけずぎらいむしと、小さなあまえんぼうむしがすんでいるんじゃないかなとおもいます。

ぼくは、ぼくのなかにすんでいるむしをきにいつています。

ぼくは、ぼくがすきです。

対象図書名

ぼくのなかみはなにでできてるのか

### 受賞者のひとこと

ぼくにはおねえちゃんがいます。おねえちゃんはぶんしょうをかくことがすきで、につきをかいったり、きくぶんコンクールにおうぼしているすがたをよく見ていました。しょうをとってひょうしょうされたこともありません。

そんなかっこいいおねえちゃんのようになりたくてぼくもきくぶんにかようせんすることになりました。

本をよみながらきくぶんにかきたいことが、つきつきとかんできました。でも、それをうまくまとめることはむずかしかったです。スラスラとかいていくおねえちゃんはやっぱりかっこよくてぼくのあこがれです。

こんかい、はじめてコンクールにおうぼして、さいゆうしゅうしようという大きな大きなしょうをとることができて、おねえちゃんにすこしちかづけたかなとおもうと、とてもうれしいです。

ぼくがいつししょうけんめいかいたさくぶんをよんでくれてありがとうございしました。

### 小学生の部・最優秀賞(小四)

勇気を出して、つながったこと

柚木 玲星



私は「ぼくのなかみはなにでできてるのか」という本の題名を見た時、どうしてはるとがそんな事を考えたのか気になった。読んでみると、その答えが分かって驚いた。

最初にはるとは、動かなくなった時計の中がどうなっているのか知りたくて、バラバラに分解した。それから、色々なものを分解しているうちに、自分の中身も分解したいと思ったのだ。私には全然思いつかない事だから、とても面白いと思った。そして、体の中身はすぐ分かるけど、見えない中身ってなんだろうと疑問を持つところがすごい。私ははるとみたいに、おこつたり、さびしかったり、くやしかったり、色々な気持ちになる事がある。けれど、そんな気持ちになる理由について考えたり、生まれた嫌な気持ちをどうしたらいいんだろうと悩んだ事はあまりない気がする。でも、頭の中でおこつ玉を作って、相手をやっつける想像をするという、はるとの元気になる方法は共感できた。

はるとは、周りの友達の中身も分解し始めて、友達がどんな人なのか、すごく詳しく見ている事がよく分かった。私は、同じクラスの友達について、どれだけ知っているのかな。もしかしたら、仲のいい友達でも知らないことがもっとあるのかもしれないと考えた。

はるとが三年生の時、学習発表会で先生に注意されて、のぼる君にもひどい事を言われた場面は本当に悲しかった。ふざけているわけではなく、一生けん命に歌っただけなのに。同じ様に私も悔しい気持ちになって、泣きそうになった。のぼる君は、はるとの立場になって考えてみた方がいいと強く思った。そして、そんな時にはるとがなぜ笑って、がまんしているのが不思議だった。きっとはるとは、自分の気持ちを相手に正直に伝える勇気がないのだと気付いた。だから、自分で自分に腹が立ったのだと思う。

やす君があと二週間で転校する事になった時、はるとはさびしい気持ちになって、やす君に友達宣言をした。はるとが勇気を出した事で、やす君と仲良くなっていくのが嬉しかった。やす君の知らない部分も知る

ことができた。二人が、とても自分らしい自分に変わっていったところに感動した。最後に楽しく過ごせて本当に良かったと思った。

私は以前、「あの子と必ず友達になりたい」と思ってた、すごく緊張しながら勇気をふりしぼって、「友達になろう。」と自分から話かけた事がある。私の思いを伝えると、相手は「うん、いいよ。」と言って仲良くしてくれた。はるとみたいに勇気を出したから、友達になれたし、いい思い出につながったのだ。私にこんな勇気があったんだと自信にもつながった。最初の一步をふみ出す事がとても大切だと感じた。そして、自分の力で思い出を作ったはるとやす君から、沢山勇気をももらった。

対象図書名 ぼくのなかみは なにでもできるのか

#### 受賞者のひとこと

初めて書いた私の読書作文が「最優秀賞」に選ばれたと聞いて、とても驚きました。

こんな大きな賞をもらったのも初めてだったので、すごく嬉しかったです。

私は友達が好きです。

一緒にいると楽しいし、一人でできないことも友達とならできるからです。

学校の友達やピアノ教室の友達、塾の友達がいて良かったと感じる事がいっぱいあります。

この本を読んで、最初は「自分の中身も分解したい」というはるとの考えが面白かったし、最後は友達と一緒にいることで自分らしくいられるっていいなと思いました。

そして、クラスの友達に対するはるとの色々な気持ちを知りました。

私も色々な気持ちになって、仲良しの友達のことを考えました。

これからも友達に勇気をもらったり、勇気をあげたりして楽しく過ごしていきたいと思います。

先生たちや作家さんに読んでいただき、本当にありがとうございました。

## 小学生の部・最優秀賞(小五)

わたしの本当のなかみ

鬼塚 なな美



わたしはクラスでせが一番小さくて、走るのも一番おそい。クラスメイトからは「チビ」と言われたり、体育の授業ではバスケットやサッカーでパスをもらえなくて、何もすることがない時だってある。

周りの人たちはわたしが小さくて、足がおそいからって見下している気がする。きっとわたしのなかみは「チビで弱虫とどんくさい」で出来ていると思われているかもしれない。

わたしと主人公のはるとは似ている。みんなから弱いと思われるところ、失敗してからかわれるところ。そんなはるとは「ぼくのなかみは弱虫と泣き虫でできている」と思い、自信をなくしていた。そんな時、同じようにはかわれていただけ、「強さ」をもったやさんと友達になって、はるとは変わっていった。自分を「弱虫と泣き虫」でできていると思ってははると。でもそれは周りの人たちから作られたイメージで、本当のはるとにはやさんと同じように「強さ」がもともとあったんだとわたしは思う。

だれかからかわれると自信がなくなってくる。わたしも周りからどう思われているかを気にして自信をなくしていた。失敗してからかわれたくないから、体育で仲間に入れてもらえなくてもがまんした。まじめに話をしてもどうせ聞いてもらえないと思って、自分の意見は言わないようにした。そうやってわたしはだんだんと周りから思われているイメージ通りのわたしになるうとしていた。そんな時クラスがえがあり、新しい友達ができた。おとなしくて、やさしい。この子なら話せるかもしれないと思い、思い切って本当の気持ちを話してみた。もしかしたらまたからかわれるかもしれないと思ったが、その友達は「鬼塚さんはまちがったことを言っていないよ。鬼塚さんはやさしいんだね。」と言ってくれた。わたしはこの友達の言葉に救われた。少しずつ自信と勇気がでてきた。今でもせは小さいし、足もおそい。でも失敗をおそれずにチャレンジしてみようと思えるようになってきた。

日本には今、一億二千万人以上が住んでいるそうだ。なのにわずかに十人ぐらいのクラス、そこでの出来事が全てのように感じてしまう。でもいやなことを言ってきたり、からかってくるのはその中でも数人だけだ。そのたった数人からの作られたイメージで、自分のなかみができてしまうことがあるのだ。でもそれは本当の自分ではない。本当のわたしは「自信と勇気とやさしさ」でできていると思っている。本当のわたしのなかみはわたしが知っていればいいし、本当の友達なら分かってくれる。失敗することがあっても、ありのままの自分でいたい。

対象図書名

ぼくのなかみは なにでもできるのか

## 受賞者のひとこと

いつも通りにじゅくの授業が始まろうとしていた時、先生から「なな美さん、最ゆうしゅう賞です。おめでどう。」と言われました。おどろいてみると、その場にいた人達が「おめでどう。」と拍手をしてくれました。照れくさかったけれど、とてもほこらしい気持ちになりました。じゅくの先生や家族、周りの人達もいっしょにじゅ賞を喜んでくれたので、うれしさが何倍にもなりました。落ちこむこともあるけれど、読書感想文や今回のじゅ賞を通して、周りの人達のおかげで、がんばれていることに気がまします。すばらしい経験と賞をありがとうございました。次の読書感想文もがんばります。

## 小学生の部・最優秀賞(小六)

思いやりを持つ意味

山本 希笑



「人間になりたかった犬」は、人間となり私と同じ小学生の世界で短い時間生きた話だ。

自分の夢がかなったら、「誰かの助けをしたい」思いがあふれている。これが学校でよく聞く「思いやりを持つ」ことなのではないかと考えてみた。

思いやりを持つことは、一言で表せることではない。考えるといつも頭の中は出口の見えないトンネルが出来てしまう。またよく思い出すことがある。私の家の猫のことだ。

私の家の猫は、人間の勝手に捨てられたのだ。父と私が「家族にしよいうよ」と言っても猫好きの母はなかなか首をたてにふらなかつた。この時私は「思いやりになるよ」と言ってしまった。「生きる時間の中で一緒に幸せな思いを育てていけるか考える」と母に返された時、使い方をまちがったはずかしさに何も言えなかつた自分を覚えていた。

あれから四年。私の家の猫は呼ぶと返事をしてくれるようになった。私は助けられてる事がある。それはピアノの練習だ。

ピアノの練習は正直めんどくさいけど、私の家の猫はピアノの音が好きだ。少しでも聞いてほしい気持ちになれるのは、私の家の猫からの思いやりなのかもしれない。

本の中のシロは、自分が犬から人間に生まれ変わるために人助けをしたかったが、今は友だちの幸せのためにできることしたいと思いが変わったと書かれている。これが胸を張って言える思いやりなのかもしれない。

しかし、私には思いやりの実感を体験したことがない。学校の先生がよく言う思いやりが頭の中でぼやけてしまうのだ。どうしたら実感できるのだろうか。

まずは自分のことを大切に、守っていくことかもしれない。その中で、本の中にあつた「好きな自分と嫌いな自分、どっちの自分と生きていく方が幸せなのか」を生きていく中で考える大切さを忘れないようにすることではないだろうか。

私の家の猫は幸せなのだろうか。人は保護したことを聞くと「幸せになつてよかつた」と言う。それは人間の勝手な思いこみではないか。母に聞くと「家族にしたことが思いやりではない。私達人間が幸せをもら

「つたと思う」と答えてきた。豊かな心にしてもらったことが私の家の猫からの恩返しな気がした。

学校で聞く「思いやりを持つこと」は先生に聞いても答えは出てないかもしれない。思いやりは、気付かないところで誰かの心を支えたり助けたりするものなのだから。

人間になりたかった犬シロカが思いやりを持っている自分と向き合っている、人間として生きたことは間違いないと思える。そして思いやりとは、自分で気付くことのない、誰かの助けとなる輝かしい世界なのだ。

対象図書名 人間になりたかった犬

#### 受賞者のひとこと

初参加は「特選」、昨年度は奇跡の「最優秀賞」、今年度は本物の「最優秀賞」。

これらを「自信」へとつなぎ、この先の人生で挫折そうな時、作文の「起承転結」を思い出し、前を向いて歩んでいきます。

これからもたくさんの参加者に「勇気」と「自信」を届ける読書作文コンクールであってほしいと願います。

私の作品を評価くださった協会関係者のみなさん、いつもはげましてくれる塾の先生方、「勇気」と「自信」をくださり本当にありがとうございます。

「心のバリアフリー」こそ

佐藤 来実（中一）



このあと、どうなるんだろう。この続きはどうなるんだろう。もう少し、もう少しだけ。ページをめくる手が止まらない。何かやるべきことがあっても、読書に夢中になっているときは、なかなか本を閉じることができない。主人公朱莉と同じく私にもよくあることだ。本好きの私にとって、この本も共感できるところがたくさんあって一気に読み終えた。

気になる手作りの本を見つけたら、作者はなんと、主人公朱莉と同じく小学生だった。本が好きすぎて、自分で物語を創作して一箱本屋のオーナーになってしまおうとは、その才能と行動力に驚かされた。たいてい人は子供だから無理だろうと思ってしまいがちだ。私ならまっ先に思ってしまう。主人公朱莉と理々亜の出会い、まさに運命的なものだったと思う。好きな読書の話で盛り上がる友達。いいなあ。私も仲間に入れてほしいと思ったほどだ。

でも、この本を読んでいく内に私が真剣に考えるべきだと思ったのは、別なことだった。「シンちゃん、邪魔」——身体障害者を略してシンちゃんと言った高校生男子。それは、明らかに理々亜に向けられた言葉だった。お店の中で車椅子が邪魔で通れない、という意味だった。それに対して理々亜は「あたし、シンちゃんじゃありません。どいてって

言われればどきますから」と毅然と言った。とてもカッコよかった。立派だった。もし、その場に一緒にいたら、私なら動揺して固まってしまった。彼女をかばえなかったと思う。彼女の母親は「身体障害者は、生意気だと嫌われるから気をつけてね。」と口癖のように言っているらしいが、理々亜はそれはおかしいと反論する。

理々亜の気持ちはまっすぐだと思った。障害者だからといって、社会に受け入れてもらおうと気兼ねなどする必要はないと私も思う。理々亜が言った「やさしい仲間はずれ」という言葉が、ずっと私の心に引っかかっていた。障害者だからと気を遣われすぎて、結局は仲間はずれにされてしまうということ。気を遣われすぎてかえって寂しいという感情。私は今まで全く考えたことがなかった。周りの人の優しさが作るよそよそしさ。それは、理々亜じゃないと分からない空気なのかもしれない。車椅子だからと特別扱いされるのが嫌だったのだろう。この本を読むまで車椅子利用者の心の内を私は少しも考えたことなどなかった。

今、私の身近に車椅子の友達はいないけれど、この本を読んで考えなければならぬと思ったことは、障害者と健常者の理想的な「共生」社会を築いていくことだ。私たちは気づかないだけで、理々亜のように障害者が社会参加できないことはたくさんあるのかもしれない。目に見える構造上のバリアフリー化は進んできてはいるが、理々亜の言うように「心のバリアフリー」はかなり遅れている。私もきつと理々亜に対して変に気を遣っていたかもしれない。何々してあげなければと、気を回していたかもしれない。それこそが、理々亜を傷つけることだったと気づかされる。

私は自分の友達関係でも思い当たることがある。三人グループでよく行動しているが、うまくいっているときは楽しいけれど、対立すると本

当に面倒なことになる。私は自己主張をしないタイプなので、対立するのは他の二人だ。その間に入ってオロオロするのが私だ。私は両方に気を遣うことになる。とても疲れる。どっちが悪いとはつきり言えないので、いつも曖昧な態度で二人に接している。二人が何日も口をきかない日が続いたりすると、私は自然に強気ではない女子と仲良くする。ある日、強気の女子がこう言った。「くるみはいいよね。二人の間を行ったり来たりして、絶対一人ぼっちになることないもんね。」——まさかの言葉にとてもショックだった。はっきりものを言わない私。人に気を遣ってばかりいる私。そんな私が強気的女子を知らない内に傷つけていたなんて。強気的女子はふだん強がっているけれど、内心は違った。これもある意味「やさしい仲間はずれ」だったのかもしれない。

心は見えないから、相手の気持ちを大切にしようとするほど、難しくなる。自分の意図しないところで誰かが傷つくのは絶対いやだ。

健常者も障害者も、友だちも私も、どうかだれも「やさしい仲間はずれ」にならない世の中になりますように……。私は心の中で祈った。

対象図書名 ひと箱本屋とひみつの友だち

大賞へ、審査員のひとこと

『心のバリアフリー』というテーマを、中学一年生という年齢でここまかで深く考え抜き、表現できたことに非常に感心しました。作品全体を通して、障壁を取り除くというテーマが自己の経験と重ね合わせられ、説得力のある展開がなされています。文章の構成力も高く、読者に対して強い印象を残す力がある作品です。今後の成長が非常に楽しみな逸材です。

受賞者のひとこと

まだ参加経験の浅い私が、「大賞」という名誉な賞をいただくことができ、驚きとうれしきでいっぱいです。今回、私が読んだ「ひと箱本屋とひみつの友だち」は、主人公が卑いすの友だちと仲直りしようと、友だちに寄り添い、自分の行動や気持ちを振り返ることで、友情を取り戻していくというストーリーでした。学校生活で、友達関係に悩むことの多い私にとって、考えさせられる点が多く、感動と勇気をもらいました。自分も友だちとの出来事に真剣に向き合おうという気持ちになりました。

また「障害者」という、ふだん触れることのない話題に戸惑いましたが、この本がきっかけで、新たな気づきを得たように思います。

先生の熱心なご指導やアドバイスのおかげで、この作文を完成させることができました。ありがとうございました。

## 中学生の部・最優秀賞(中一)

帝国ゲーム

時信 瑠果



帝国。私にも小さいけれど私なりの帝国がある。その帝国内ではしばしば私の事を悩ますすやかかな事件が発生する。今という多感な時期は、本当に些細な事でトラブルになる。もつとも多いのは、帝国民関係のトラブルである。そこでこ

こでは、私の帝国なので先生を指導者、同級生を帝国民としよう。

「授業中に笑われた」「私の彼氏、彼女を取った」「ただただ気に入

らない」などなど冷静になればそんなに腹の立つ事ではないけれど多感  
と言うだけで感情が制御出来ずに私の一人の善良な帝国民に対して大勢  
でSNSで攻撃する事だ。私はまだ標的にされた事は無い。でも攻撃軍  
のグループに入れられた事はある。ネット上ではグループの招待がある  
と、私の意思とは関係なく入れられてしまう。そんな時は卑怯と思われる  
るかもしれないが、徹底してグループ内の会話には入らない事と決めて  
いる。何故なら良かれと思って言った発言でも受け取った人達の捉え方  
は違うし、文章の伝わる熱量も違ってくるからだ。そして当事者同士で  
の争いではなく参加している人達同士でのトラブルが発生するからだ。  
でも私の場合参加しない事に徹底し過ぎて逆に発言しない人がいると言  
われ、スパイ疑惑まで出てしまった。

私も佐紀のように帝国民関係を窮屈に感じている一人だ。とにかく平  
和に過ごしたいと思っても何度も何度も後悔するような出来事があ  
ったりもする。一人で休み時間を過ごす事だっただけで、自分がぼっ  
ちりになりたくないと言う思いで、相手の事を知ろうともせずに一緒にい  
た人もいた。また、感情面でも佐紀と同じく自分が置かれた状況を人の  
せいにしていた。そんな私が自分自身の事だと捉える事が出来たのは母  
のお陰かもしれない。私は良くも悪くも、帝国であった出来事をすべて  
報告した。「褒められて嬉れしかった」「帝国民どうしがケンカした」  
「私が嫌な思いをした」など一日にあった事を全て聞いてもらった。そ  
の時の対応が子供に対する接し方ではなく対等な立場での意見をくれ  
た。特に私が嫌な思いをした時は共感し私の思いを肯定してくれる。で  
も、私自身に非がある時は「あなたの言い方や態度が悪いから攻撃され  
たんだよ。今度から気をつけようね。」と必ず原因と解決策を教えてく  
れる。そんな母の「相手の気持ちを考えた言葉」から、自分の非を認

め、自分がこの人はこんな人と思いついて見方を、変えて見る事が  
出来た。

母は常々「今どきの帝国民達は賢いから子供用の対応の仕方ではなく  
大人になって通用する考え方や対処の仕方が必要だ。」と言っている。  
そんな時に私の大切な帝国民の一人が有りもしない事でSNSで総攻撃  
を受けていた。今回もただ見守る事しか出来なくて歯がゆい思いをして  
いた。親や指導者に相談する事を勧めたが「親には心配かけたくない。  
指導者にはなかなか言い出せない」と言われ私は何も出来ずにいた。そ  
こで私は母に事細かに伝えた。母も私の色々な思いを考えてくれた上で  
大人が介入しないと解決出来ない事、サポート出来る事はしてあげるよ  
うにと助言してくれた。私は母から学んだ相手の気持ちを考えた行動を  
民に精一杯し、寄り添った。攻撃から一週間たった頃、母が言ったよう  
に大人が入り、攻撃相手の親や当事者達のたくさんのお話し合いで何とか  
解決したようだった。

私の母は自分の子が同じような状況にあつたら攻撃された全ての内容  
の保存とあらゆる機関、例えば弁護士や警察などに相談に行くと言って  
いた。それは帝国内だけのトラブルと見れば子供同士のじゃれ合い、も  
しくは軽いイジリなどで済まされるが一步帝国を出た世界では「脅迫」  
にあたると思う事だ。大変な事をしでかしていることを攻撃相手に認識  
させると共に被害者にも認識させたいと思っているようだ。そうするに  
は私が母にすぐに攻撃された内容を報告出来るかにかかっている。当事  
者はいざとなったら二次被害、三次被害を恐れて報告する事が出来ない  
からだ。でも私は母から「ホウレンソウ」のアイテムを貰っている。だ  
から私は出来るはずだ。報告・連絡・相談が子供の内から身に付けば、  
今後どんな帝国に行っても解決する方法が見付かるはずだと。

考えた。私は「私の帝国」と言うRPGゲームの中の主人公になると言う事を。RPGゲームとはプレイヤーが何らかの役割を与えられてプレーしていくゲームだ。目的を達成したり戦闘することでスキルアイテムが増えたり自分のレベルも上がっていく。私の帝国内での難解な事件を一つ一つ攻略する事で役立つアイテムをゲットし助言者の協力を得る事で窮屈に感じている世界でも捉え方や見方次第で楽しみながら私の帝国を築きあげる事が出来るはずだから。

対象図書名 青春ノ帝国

### 受賞者のひとこと

三年連続で賞を頂けるとは思わなかったので驚きと嬉しきでいっぱいです。ありがとうございます。

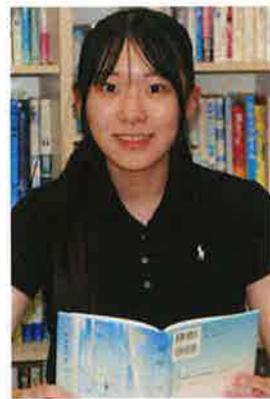
実は毎年、読書作文コンクールの本との出会いは私と相性がいいがどうか読み終わるまでドキドキしています。主人公と共感出来て自身の思いを文章に表現する事は難しいです。特にまとめの段階で自分の気持ちをまとめるのが苦手ですが今回はいつもと違う感じでまとめの事が出来て良かったです。

まとめの段階でふとゲーム内の主人公に私になったらどんな感じだろうと思いました。でも、普段ほとんどデジタルゲームをしないのでルールをネットで検索すると私自身に当てはめる事が出来て楽しみながら読書作文を仕上げる事が出来、私専用のゲームを作る事が出来ました。このゲームは今後の生活にも活かせるはずだと確信しました。

## 中学生の部・最優秀賞(中二)

自己改革の旅

相田 あづき



歩き続けさえすれば、目にする眺めは必ず変わる。確かにそうだ。歩き続けていたら、自分が見たいと望む景色はいつか見ることはできる。だから行動することが大切だとつくづく思う。

私と同年の十四歳の主人公、佐紀は、自分のことを道端の小石のような存在でしかないと思っていたようだ。それは全く違うと思う。この年齢ですばらしい出会いがたくさんあって、青春という名の「帝国」があり、共に戦った「同志」と呼べる人がいること自体とてもうらやましいことだと思う。どんなに離れていても、たとえずっと会わずにいっても私たちはいつまでも共にあり続ける。そうはつきり言えるのは本物の同志の証拠だといえる。読み終わってからも私の興奮はずっと続いていた。

悩みなど全くないように見える人。毎日楽しくて幸せそうな人。明るくて運動も勉強もできて、クラスの人気者。文句なしの何もかもを手に入れてるように見える人。そんなうらやましく見える人がどの学校にも一人や二人はいるだろう。かと思えば、クラスの中で目立たない、存在感のない正反対の人もいるだろう。私の場合どちらでもない。でも中学生になってから私は、周りからどう見られ、どう思われているかがとても気になるようになった。主人公佐紀の悩んでいることは取るに足

りない小さなことだと思いつつも私も佐紀の気持ちがよく分かる。

クラスの中ではどうしてもグループが出来上がってしまう。女子のグループは特に何かと面倒だ。私はもめ事が嫌いだ。それなのに私は五人グループの中にいる。表面上は仲良くしているように見えても、裏では平気で悪口を言う人の存在を何度も見てきた。五人は決して対等ではない。強気の子が中心人物となる。私はつまはじきされないように、その子の顔色ばかり見ているような毎日。自分が悪くなくても「ごめん」と謝ってしまう自分が情けない。なぜあんな態度をとったんだろう。いつまでも後悔ばかりしている自分が許せなくなることがある。ちゃんと自己主張できない自分が一番悪いんだと、結局いつも自己嫌悪に陥っていた。

そんな私が去年の夏、シアトルに三週間短期留学することになった。心はずませて出かけた。まずキャンプから始まる。同じテントの中はほとんどがアメリカ人、そして全員が初対面だった。ここで手厳しい洗礼を受けることになるとは想像もしていなかった。私は英語が話せることで安心してはいたが、何でも自分から意思表示をしないと、物事が何も進まないことに気づく。自分から積極的にコミュニケーションをとろうと話しかけないと、仲良くはならない。自分のこともちゃんと話さないと仲間には入れない。いつもの調子で内向きな私は、食べるものにも満足にありつけず、自分から意思表示をしなかったせいでシャワーも使えずじまだった。楽しいどころか、全くなじめず途方に暮れる三日間だった。受け身状態でいると、自分だけ取り残されてしまう。内向的な私も、さすがにこのままではだめだと思った。日本で一人ぼっちになるのをおそれていた私が、アメリカに来て「ひとりぼっち」になっていた。誰かに話しかけられるのを待っていたら、友達が一人もできないことに

なる。現状を打破できるのは自分しかいないと自分を叱咤激励し、四日目にしてやっと自分から話しかけた。一緒に行動することで相手のことも分かるようになる。分かり合えると楽しい。確かに、知らない者同士が集まっているのだから、理解し合うにはお互いに話すしかない。自分がどう考えるかを伝えることで、自分がどんな人間か分かってもらえる。帰国する頃には本音で議論することが楽しくなっている自分に気づいた。

シアトルの旅はまさに「自己改革」の旅だった。日本人とアメリカ人の国民性の違いはよく言われるが、私にとっては衝撃に近かった。アメリカ人で私のような内向的な子は見当たらなかった。みんな自分の考えをちゃんと持っていて、感情をはっきりと表現する。まさに個人主義の傾向が強いアメリカをこれでもかという程感じた三週間だった。

一日の大半を過ごす学校という「帝国」で同じ時間を共有する友達がこの先「同志」となり得るかどうかは、かなりの割合で自分次第だと思えるようになった。どんな人も、ある一面だけで存在しているわけではない。誰もが自分の内面に抱えた悩みがある。アメリカ人と触れ合っていた。変わりたいと思う自分がいる限り、きっと私は変わるだろうと。

主人公佐紀が言うように、歩き続けさえすれば自分の見たいと思う景色を見ることが出来る。その景色は自分がこうありたいと思う自分なのかもしれない。

## 受賞者のひとこと

夏休み中は多くの予定が入って、セミナーのみんなと同じ授業に出席できなかった分、別の日に集中して作文を書きました。先生のアドバイスをいただき、昨年のシアトル留学の経験を入れました。この短期留学は、意思表示することの大切さを学ぶ、まさに「自己改革の株」でした。改めて、すべての経験が学びに繋がることに気づき、考えを深めることができました。私が読んだ「青春の帝国」は登場人物それぞれの苦悩が描かれていて、考える要素がたくさんありました。

毎年、作文を書き続けていく中で、読書をきっかけに自分の内面と向き合うようになり、作文を書く時間そのものが楽しいと実感しています。来年はコンクール参加最後の年となります。今まで学んだことを活かし、最後まで作文を書くことを楽しむ姿勢を貫きたいと思います。三年連続で「最優秀賞」という名誉ある賞をいただいたことを心からうれしく思います。入塾以来、変わらず熱いご指導をしてくださる先生に心から感謝しています。ありがとうございます。

## 中学生の部・最優秀賞(中三)

一面だけで判断するのは



高橋 杏

夜空に咲く大輪の花、花火。打ち上げ花火の迫力と美しさは、私たちが別世界に運んでくれる。今まで何気なく見ていた花火だが、一つの花火を作るのに二ヶ月以上、物によっては半年も

かかるものもあると知り、職人たちの苦勞があつての輝きだと気づかさ

れる。主人公円人は、息をするのも忘れるくらい花火に見入っていた。そしてひとりで涙が流れていたことも見逃せない。言葉にできない感情が走つたのだろう。この本を読んだことで、地元で今年見た花火大会は、今まで以上に体全体に響き、私に希望や勇気を与えてくれた。花火ってやっぱりいいなあ。心からそう思えた。

人は誰もその人の一面だけを見て、それが全てであるかのように思つてしまいがちだ。円人を取り巻く人々の別な面に触れ、私はその人の本質を見ることこそが大切だと気づかされた。

今、少年犯罪が凶悪化してきている。そんな報道を聞くたびに私は腹が立つ。まるでゲーム感覚で、いとも簡単に人の命を奪つたりするような若者には、本当に憤りを覚える。感情に歯止めがきかず、すぐにキレてしまう少年たちは、全くといっていいほど想像力が欠如している。死に追いやつたその命はリセットなんかできないのに。他人の人生を奪つて平気でいる少年たち。反省の色が全くないことにも驚かされる。どんなに残忍なことをしても「少年法」というものに守られ、加害者なのに「更生」という名目で支援してもらえることに、私は何度も理不尽さを覚えた。未成年ということで、更生と社会復帰が支援される。未成年だから厳しい罰を与えない。未成年だから将来を考えて更生させる。未成年だから名前も公表されない。加害者なのに守られている。被害者側にとっては、加害者が少年であろうと成年であろうと、受けた苦痛や悲しみは変わらないはず。命を奪われた家族はその悲しみを一生背負っていくことになるのに。もし私が被害者の立場だったら、つらすぎて生きていく気力さえなくなるだろう。とても耐えられない。被害者側の感情はなおざりにされている。少年犯罪の報道を聞くたびに、私はそんな矛盾を感じてきた。

事件を起こした円人に対して、花火店で働く富樫という男は快く思っていないことも少し頷ける。円人の一面だけで判断するならば、どうしてもそうなる。人間なんてそうそう変わるもんじゃないと富樫は言った。傷害事件を起こすようなやつは、カツとなったらまた同じようなことをやると思いついていた。富樫の挑発に乗って円人が胸元をつかんだとき、私は思わず「だめだよ！」と心の中で叫んだ。せっかく自分自身も変わろうとしているはずなのに。何よりも円人を信じ、花火職人になることを勧めてくれた人がいることを忘れてはいけない。その人を裏切ってはいけない。更生を願って親身に接しても、必ずしもみんなが更生できるとは限らないのが現実だという。それでも、補導委託を引き受け、諦めずに根気よく接している人がいる。深見さんの人のような存在を知り、私は頭が下がる思いになった。暴力事件を起こした円人は、世間から見れば加害者であり、犯罪者であることは確かだ。暴力を振るった加害者だが、正確に言えば、円人は畏にはめられた被害者でもあった。

人はとかくその人の一面だけを見て全てを決め付けようとする。実際私も、学校であまり評判の良くない女子とは関わらない方がいいと思っ  
て避けてきた。「感じの悪い子」というみんなの噂を、何となく鵜呑みにしていたが、実際は全く違っていた。陸上で記録を出せず、落ち込んでいる私のところに駆け寄ってきてくれたのはその彼女だった。自分なりに力一杯頑張ったつもりだったが、結果は最悪だった。向かい風だったせいもあるが、それにしてもひどかった。負けず嫌いの私は人前で涙を見せたことがなかったが、この時はあまりのショックで、私は人目もはばからず泣きじゃくっていた。みんな自分のことで必死なので、私のことなど構ってられないという空気だった。そんな中、彼女だけが私

に駆け寄って「こんな時もあるよ。大丈夫！次がんばれば！」とエールを送ってくれた。短い言葉だったけれど、その声には温もりがあった。その表情には確かな思いやりがあった。私はその時、彼女のことを何も分かっていなかったことに気づいたのだった。

考えてみると、この物語の登場人物は皆、見えている一面だけで判断してはいけないと、教えてくれているように思う。特に、無頓着でだらしなく見えていた深見さんは、実は根が真面目すぎるほどの人だった。

「大丈夫！お前は俺が保証する！」熱く力強く円人に言ったその言葉が忘れられない。その瞬間、私を励ましてくれた彼女の言葉と重なった。

対象図書名 夜空にひらく

#### 受賞者のひとこと

中三の私にとって、コンクールに参加できる最後の年に、このような大きな賞をいただけで、心からうれしく感謝の気持ちでいっぱいです。小学三年生で入塾した私は、毎年作文コンクールに参加してきました。七年間書き続け、今回がついに最後の参加となりました。今まで先輩たちの作文から多くのことを学んできました。入塾したばかりの頃は、先輩たちの作文力に圧倒されるばかりでしたが、今では私も先輩となり、少しでも先輩たちにお手本を示せたらと思っています。この七年間、たくさん本を読み、作文を書き、大いに考えたことで自分も成長できたように思います。自分が書いた作文も、その証として宝物のように思います。異学年で切磋琢磨し合える恵まれたセミナーの環境で学んだことを、高校生になってからも生かしていきたいと思っています。

コンクール参加の機会をいただけたこと、そしてこれまで指導してくださった先生に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。





第34回(令和6年度)全国読書作文コンクール

**優 秀 作 品 集**

令和6年10月 発行

発 行 公益社団法人全国学習塾協会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2

TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294

E-mail [info@jja.or.jp](mailto:info@jja.or.jp)

